

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 25日現在

機関番号：31302

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22830043

研究課題名（和文） 紛争後北アイルランドにおける「個人の物語」の位置
－相互行為分析と言説分析から－研究課題名（英文） The Location of Personal Stories: Narrative Interactions and
the Dynamics of Social Discourse in Post-Conflict Northern Ireland

研究代表者

酒井 朋子 (TOMOKO SAKAI)

東北学院大学・教養学部言語文化学科・講師

研究者番号：90589748

研究成果の概要（和文）：

本プロジェクトは、広く共有された歴史認識や社会認識が紛争後の移行期にあって変容していく様子を、英国領北アイルランドを事例に検討したものである。関心の中心は、個人の経験物語の社会的な位置づけや象徴的意味にある。とくに人びとが自分の紛争経験を日常的に語りあう行為に着目し、こうした行為が従来の社会集団・民族集団の区分を一方では強化しながら、それを超えるような新しい歴史解釈を生みだしていく様子を、聞き取り・参与観察データから明らかにした。また、個人の経験物語が紛争史をめぐる政治言説のなかで占める位置を、メディア分析・言説分析から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This research project explored, through a case study of Northern Ireland, the transformation and reconstruction of the collective notion of history in the aftermath of political conflict. It considered personal stories of conflict experiences as taking a vital place in the reformation of collective memory and approached them from the following two perspectives. Firstly, it examined local people's daily practices of sharing narratives, observed during fieldwork conducted in Belfast in early 2011 and 2012, and analysed how the existing group categories were redemarcated through the narrative practices. Secondly, the project analysed mass media program, books and reports that publicise testimonies of the conflict, examining the symbolic location of personal narratives in the macro discourse about the history of the conflict.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	960,000	288,000	1,248,000
2011年度	1,090,000	327,000	1,417,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,050,000	615,000	2,665,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：移行期社会、紛争、ライフ・ストーリー、物語行為、証言、集合的記憶、アイルランド

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は本プロジェクト以前の研究のなかで、1960年代末より長期の政治紛争を経験した北アイルランドをフィールドとし、この社会の集合的な歴史記憶を研究し、また個人のライフ・ストーリーの聞き取りをおこなってきた。そのなかで、前者がいかに後者の土台となっているのか、あるいは両者のあいだにどのような確執があるのかを検討課題としてきた。その結果、一見空虚な統治の神話であるかに見える民族主義的な歴史物語が、個人個人の情動と複雑に融合している様子をあきらかにすることができた。

しかしこの逆のプロセス、すなわち後者が前者に与える影響については、十分に検討することができなかった。紛争が一段落を迎えた移行期の社会にあっては、社会における支配的な歴史観もまた変容していくが、その再構築過程において個人の証言や物語がいかなる位置を占め、どのような意味を付与されるのかを明らかにする必要があるが生じてきたのである。この双方向からの分析を通じ、社会で共有される歴史認識と、個人の人生物語との関係性が、よりダイナミックに描きうると予想された。

また、個人の語る物語が社会的価値を反映するしくみはあきらかになったが、「語りの行為」の問題、言い換えれば人びとが自分の経験を他人と語りあうおこないが、社会的相互行為としてどのような意味をもち何を生み出しているのか、という問題も考察が不十分なままに残された。本研究は以上の課題を引き継ぐものとなった。

2. 研究の目的

本研究が目指したのは、第一に、個人の紛争経験としてパブリックな場で語られる物語が、移行期社会の政治言説のダイナミクスのなかでどのような位置を占めているのか、という問題である。移行期にある社会においては、政治体制や社会体制だけでなく、人々の日常的な社会関係や行動指針をささえる価値体系も、また揺らぎ再編されていく。このなかでは、「紛争がいったい何をめぐるものだったのか」「問題となる暴力とはどのような種類のものだったのか」などの事柄が、さまざまな社会的主体の利害と結びつく論争的トピックとして、直接的・象徴的に争われる。この言表レベルでのせめぎあいのなかで、個人の証言や経験談が、どのように政治的ツールとして用いられるのかを検討していくことが目指された。

さらに本研究の第二の目的は、和平合意以後、人々が日常生活のなかで過去の経験につ

いて語り合う行為が、どのように社会関係や歴史認識の再構築に影響をおよぼしているのかを明らかにすることにあつた。1980年代からの社会的記憶研究のなかで頻りに指摘されてきたように、「共有の過去・経験」を描き出すおこないは、社会集団、政治集団、文化集団としての「われわれ」の像を（ときには排他的に）作り出していくおこないである。紛争後社会において同様の行為がなされるとき、これは対立していた集団やコミュニティの枠組みを強化、あるいは解体・再編する政治的なおこないともなる。このおこないが、小規模な集いのミクロなインタラクションのなかで行われる様子を分析することが目指された。

また本研究は、北アイルランド以外の社会における、紛争以外のものも広くふくむ苦難の経験の語りとも比較検討をおこなうことを想定していたが、研究開始当初においては、その具体的な比較対象は確定していなかった。その後の研究の過程において、フィールドワークを通じて培ったつながりや論点の重なりなどから、南米チリの政治暴力の証言、とくに裁縫作品（キルト）という非言語的な視覚的・触覚的媒体をもちいた証言との比較が現実化していくこととなった。

3. 研究の方法

前に述べた目的のために、本研究は大きくわけて二つの研究方法をとった。まず、個人の経験談が紛争にまつわるマクロな政治言説のなかで占める位置づけについては、個人の紛争証言を広く社会に向けて出版・公開しているいくつかのプロジェクトを調査し、またテレビ・ラジオ番組などで個人の紛争経験をとりあげている番組の内容分析をおこなった。

また、自身の経験談をミクロな関係性のなかで語り・聞くという行為が社会集団を再編していくプロセスについては、地域コミュニティのお茶会や、住人らが紛争経験を語りあう集い、セラピー目的の語りのワークショップなどで参与観察をおこなった。またその関係者や参加者に、聞き取り調査もおこなっている。聞き取り調査については調査後に部分的ではあるが録音データの書き起こしをおこない、身近な他者との日々の情報共有の影響が語りの中にどのようにあらわれるか、という詳細なレベルの分析が可能な形態にした。なお、この調査をおこなったのは、紛争がとくに激しかった都市部ベルファストの労働者階級地区であり、古くからコミュニティの結びつきの強い場所である。

以上、二つのレベルから検討を進めるため

に、2011年度と2012年度の終わりに各1回ずつ、北アイルランドに3週間～1ヶ月滞在し、資料収集ならびに参与観察・聞き取り調査を行った。

また、研究代表者は2010年度所属先であった大阪大学グローバルCOEプロジェクト「コンフリクトの人文国際教育研究拠点」の研究活動事業として、2010年10月に「抵抗を縫う一チリのキルトにおける触覚の物語」と題する展覧会を開催した。このさい本課題の研究活動として、チリ真実委員会にかかわり、現在は北アイルランドでキュレーター／研究活動をおこなう研究者を招聘しシンポジウムも同時開催した(2010年10月16日、大阪大学総合学術博物館)。これはチリ独裁体制のさなかに作られた歴史証言媒体としての裁縫作品、ならびに和平合意後の南北アイルランドで歴史を題材として作られた裁縫作品とを、比較検討することをねらいとしたものであった。分析の焦点を北アイルランドの事例に絞っていることは、地域的な固有文脈をおさえた適切な考察を導きやすいという点で本課題の利点になっているが、同時にその視野を制限する要因ともなっている。その意味で、このシンポジウムは本研究に視覚の広がりを与えるものになったといえる。

4. 研究成果

本研究では、個人の証言が集積され、あるいはたがいにすりあわされることを通じて、社会のマクロな歴史認識・社会認識が改変・再構築されていくプロセスを検討した。まず、第一の言説分析の研究手法によって明らかになったのは、次のようなことである。

- (1) 政治的価値観が変容をむかえる中で、既存のマクロなイデオロギー対立が「個人の経験談」のせめぎあいの形態をとってあらわれている。
- (2) 移行期にある社会においては、何が支配的／対抗的な語りであるのかという事柄そのものが、争われ、交渉され、挑戦される対象となっている。

争いや暴力の構造について既存の政治的説明・意味づけ・主張を行うことが、「ポスト紛争期」であるはずの時代においては紋切り型で時代遅れとの認識が、こんにちの北アイルランドでは広く共有されてきている(雑誌論文②、学会発表①)。そのなかで、明白に政治的と見える言述をあえて避け、かわりに「具体的な個人の事例」が紹介・言及されるなかで、「紛争の主要な加害者・犠牲者とは誰であったのか」、ならびに「紛争について語る権利をもつのは誰なのか」、といった問題が争われている状況がある。そこでは、国家権力の担い手であるイギリス軍による

不正行為や被害の経験談に対し、アイルランド共和主義武装グループの活動による被害の経験談が対置されるなど、紛争中の政治対立構造がかなりの程度で継承されている様子がうかがえる。さらに、そこでは過去の暴力の意味と構造についての共有理解がいまだに確立されていないのみならず、(2)に記したように、たがいがたがいを「社会に広く浸透した支配的観念」ではあるが「真実を正しく伝えていないもの」と見なし、対する自分側の事例を「これまで認知されてこなかったが重要な意味をもつ経験」として打ち出す、という戦略を用いるのである。

このように「個人の経験談」があえて政治言説のツールとして用いられる理由は、P. リクルや F. カーモードら解釈学者たちが指摘してきたように、個別の経験を語る物語がメッセージ性を「隠して伝える」機能を有していることに由来すると思われる。

さて、第二の日常的な語り行為の分析からは、以下のことがあきらかになった。

- (3) 人びとは顔見知りの間柄での日常的なおしゃべりとしての「過去語り」を通じ、「社会の一般的な経験」を押し量り、自分の経験物語を再構成していく。
- (4) その「過去語り」の交換を通じて、ミクロなコミュニティの集合的経験が形成されていく。
- (5) 一方で、経験を物語り意味づけるという行為は、社会に生きる他者との共有経験やつながりの、新たな発見にもつながっていく。

北アイルランドの労働者階級居住区では、長期の紛争継続によって紛争や暴力は日常を構成する一部となってきた。そのなかで人びとが日々おこなうおしゃべりの多くは、過去の・最近の暴力的な経験についての語りを多分に含んでいる。さらに民族的・宗教的にゲッター化したコミュニティにおいては、まず地域的に特異な紛争経験や知識が共有されており、かつ生活空間の身体感覚が共有され、また、隣人・友人・親戚などの社会的ネットワークがかなりの程度共有されている。そのなかで恒常的に経験談の共有がなされることによって、「自分自身の経験」と「他人の(知人の・友人の・家族の)経験」はたがいがたがいを解釈するための素材となり、そして融合しあい、境界をあいまいにしていく。ゆえにミクロな地域的コミュニティに生きる複数の個人が、ひとつの経験を「自分たちのもの」と見なすような現象が生まれてきた(雑誌論文①)。これは紛争中にも見られた現象と思われ、コミュニティ単位の強い帰属意識や、「紛争における暴力とはどのようなものだったのか」というようなマクロな認識のズレを再生産してきたものと思われる。

だが、語りの行為は既存の民族区分を強化するだけではない。物語はその構造的性質として隠喩的機能をもつ。隠喩的機能は、それまで思いも寄らなかった二つの事物のあいだに類似性を作り出す可能性をもっている。紛争の語りのなかでも、自分がへてきた経験を紋切り型ではない形態で語り直そうとする試みのなかで、社会に生きる他者の経験とのあいだに、新しい類似性が発見されるような例が見られた。自分の経験を新しい解釈と意味づけのなかで語ろうとするとき、宗教的（プロテスタント・カトリック）、民族的（イギリス人・アイルランド人）、政治的（君主制支持・共和主義）、といった既存のカテゴリを超えるかたちで、新しい社会的なつながりが見いだされるのである（雑誌論文①、学会発表③）。

以上が本研究の主要な成果であるが、この過程で、いくつかの重要な方法論的発見があり、それらを論文および学会報告の形で発表した。一つには、調査言語が質的研究においてデータ分析と収集可能なデータの範囲に及ぼす影響の問題（雑誌論文①）、ならびに暴力の経験にまつわる調査の困難と、調査者の部外者性によって導かれる発見の可能性についてである（図書①、学会報告②）。

また2010年10月に行った、展覧会に連動するシンポジウムは、政治暴力の証言活動についての地域間比較の機会になるとともに、言語的なものに限らない、多様な歴史証言の形態の可能性を検討することをねらいとしており、重要な結果をおさめることができた。まず研究への刺激という面は、他地域の事例をよく知る研究者と対話を深めることで本研究の視野が大きく広がった。また、裁縫作品という証言媒体の可能性は大きい。政治的・社会的な苦難の経験を伝えるものとしては、従来、言語的な媒体に圧倒的な重きが置かれていたが、この展覧会・シンポジウムで取り上げたキルト・アートは、言語では表現困難な感情や観念を包摂して伝える可能性をもっている。また、特段の高等訓練を積まない一般人が制作に携わっていること、ワークショップという共同のインタラクションの場において制作されていくことなども重要である。歴史の証言活動というものが、ただ過去の事実を伝えるものではなく、そのプロセスそのものが対話と関係性の生成の可能性に満ちていることが強調されねばならない。研究代表者はこれまでオール言語の語りに重点をおいて研究を行ってきたが、今後は、視覚的物語が歴史証言として有しうる可能性についての検討を深めていきたいとも考える。

またこの企画は、展覧会と連動したシンポ

ジウム開催という形態をとったことで、研究者にかぎらず広く一般の来場者・参加者をえることができた。その意味で、本研究の研究成果を広く社会に公開することができ、意義ある企画になったと言える。研究論文や学会報告が、厳密な議論を提供し学説を刷新していく最良の道であることは言うまでもないが、こうした形態では、アカデミズムの外に生活する人びとに研究の意義を理解してもらい、またその興味深さを享受してもらうことが困難であるのも確かである。

今後も、研究論文や学会報告のような、学界をターゲットとした成果発表をコンスタントに行いつつも、今回の展覧会とシンポジウムのような、研究成果のオルタナティブな社会公開方法に積極的に取り組んでいきたいと考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ① Tomoko Sakai, *Storytelling Practices and the Formation of Collective Experience: Narratives of the Conflict in Northern Ireland*, *Senri Ethnological Studies*, 査読有, 巻号未定, forthcoming, 掲載決定済.
- ② 酒井朋子、「揺れる日常、変容する記憶：和平プロセス以後の北アイルランド社会」、『東北学院大学英語英文学研究所紀要』、査読有、第37号、2012、1-29.
- ③ 酒井朋子、「コンタクト・ゾーンとしてのライフ・ストーリー調査—非英語圏出身者が英語で質的な聞き取りをおこなうことについて」、『コンタクト・ゾーン』、第4号、2010、査読無.

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 酒井朋子、「移行期社会における記憶と歴史—和平条約後の北アイルランドにおける—」、日本オーラル・ヒストリー学会第9回大会、2011年9月、松山大学.
- ② 酒井朋子、「紛争経験をきくということ」、大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」主催シンポジウム「コンフリクトをみる・きく」、2011年1月、大阪大学.
- ③ Tomoko Sakai, "Identity and Afterwardness: Narrating Social and Personal Changes in Northern Ireland," XVI International Oral History Association Conference, July

2010, University of Economics in
Prague.

〔図書〕(計 1 件)

- ① 酒井朋子 (共著)、「コンタクト・ゾーン
としてのライフ・ストーリー調査—第二
言語での聞き取りにまつわる方法論的
考察—」、『コンタクト・ゾーンの人文学
第一巻 Problematique/問題系』、晃洋
書房、2011 年、79-102 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井 朋子 (SAKAI TOMOKO)

研究者番号 : 90589748

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし